

## 「クリエイターの話 ～ 私のイメージの源泉」

スペースデザイン部会員 桜井 玲子

### 『 絣（かすり）との出会いが全てのはじまり 』

**絣との出会いは、全てのはじまりでした。**

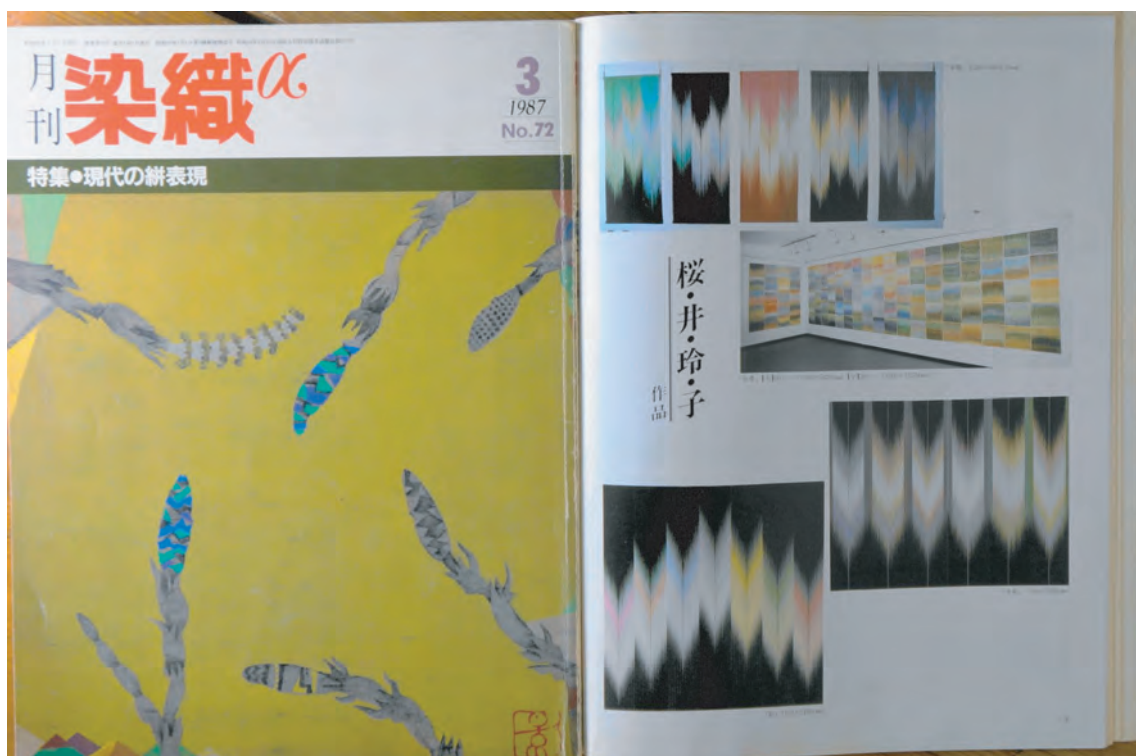
『数年前、京都の骨董品店でトルキスタンのチャパンを初めて見た私は、昔無くしてしまったものが目の前に差し出された様な、不思議さと懐かしさを感じました。

その径絣の絹織物は、薄墨色の地色に緑と赤の配色で大胆に構成されたものでしたが、絣特有の「ずれ」の形が単調さを補い、「絣足」が対立的な配色から受ける強烈さを和らげ、むしろ静かな印象を与えていました。

絣に心魅かれるようになっていた私は、沖縄の那覇で喪服として着用されていたという白絣の裂を本の中に見つけました。白地に藍色の幾何模様構成には、清潔で上品な雰囲気があり好感が持てましたが、それ以上に感動したのは、白地に滲んでしまった藍の淡い水色が語りかけてくる情感でした。それは、哀しさや寂しさを内包しながらも尚、凜としたすがすがしさでした。

トルキスタン、那覇の絣から受けたインスピレーションは、混沌とした袋小路の世界で悩んでいた私に、創作形式を示唆してくれました。絣という、とりたてて珍しくも無い技法の中にひそむ、絣足、滲み、そしてずれによる炎のような効果の美しさは、私の作品の確かな要素に成り得ると直感したのです。』(雑誌「月刊染織α」絣表現特集号より)

私の表現したいものには、何かしら同じ様なイメージがあると感じます。移ろうもの、壊れない程度に揺らぐ在り方、自然な感じが美しいと思っているからかも知れません。絣を選択したのも、そこに感覚的に共通する世界を見たのだと思います。





1987年「気配'87」(H385 × W240)

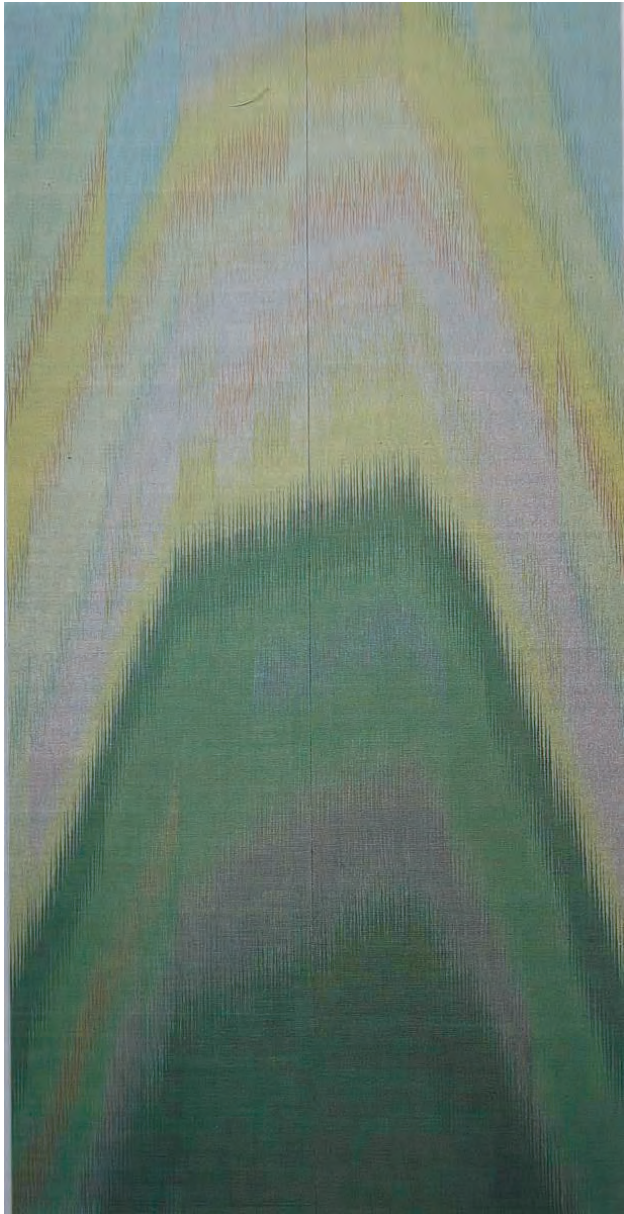
2003年の夏、チャンスを得て宮崎県立美術館での個展にチャレンジしました。今までの新作発表とは異なり、10年位の期間に制作したもので会場構成したものです。自作20点を同時に見ることは初めての経験でした。

当時の宮崎において、タピスリーの認知度はかなり低かったと思いますが、美術館のギャラリーと言う事もあって、多様な方々との交流がありました。

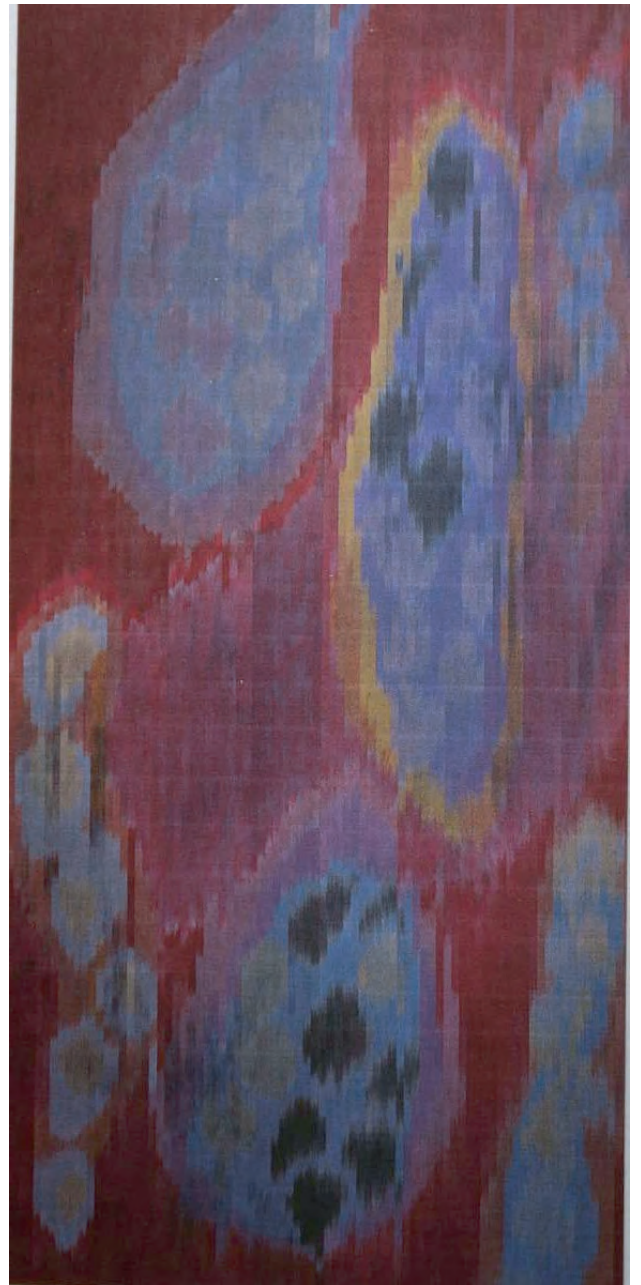
私は、作り手の内なる感情移入と見る側との共感があって、はじめて、タピスリーが作品として成立すると考えていました。この個展を通じて、改めてこの事の大切さに気づかされました。





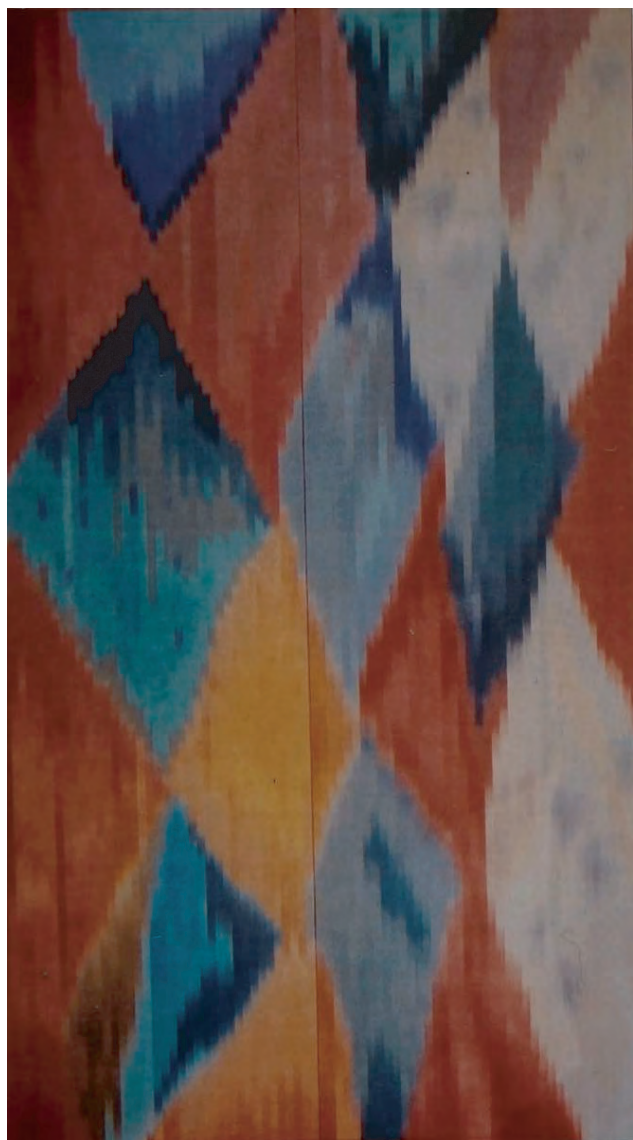


1996年「生まれの萌」(H330 × W175)

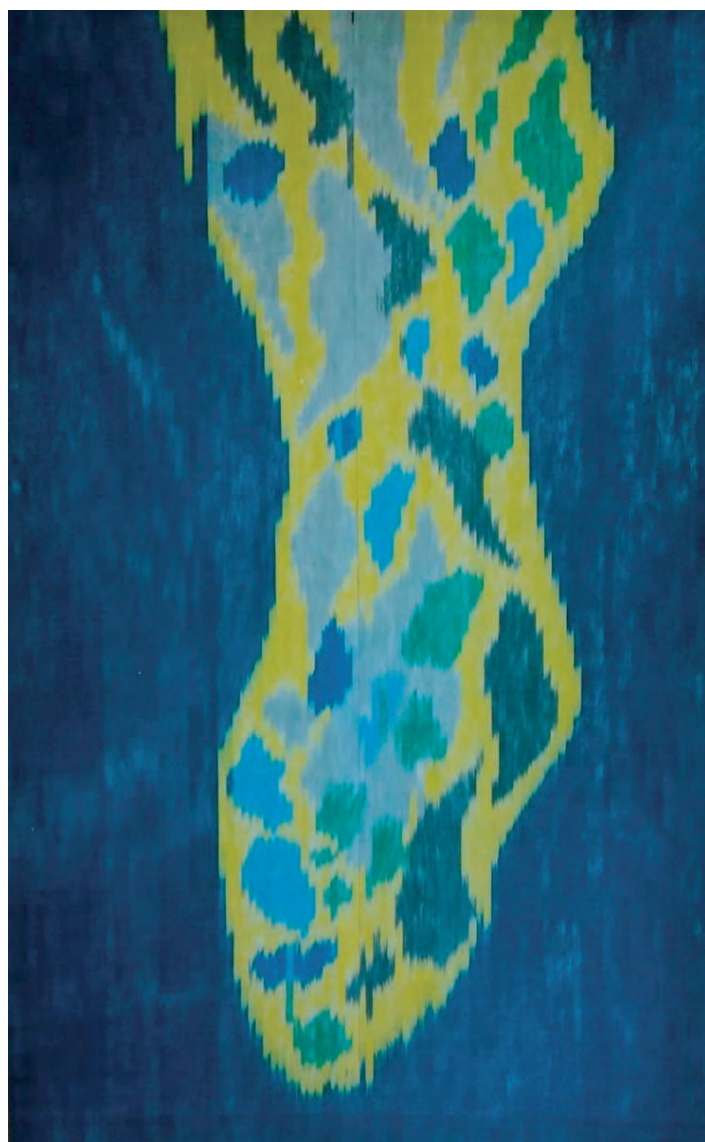


2002年「たまゆら #02-02」(H435 × W210)

私の創作の原点は、目にみえる何かではなく、既に心の中に刻印されている何かの思いや、気分といったものです。私の志向する感情表現にふさわしい方法である絣に出会ったことで、創作活動が続けられています。それは、これからも変わらないだろうと思います。



2008年「Untitled:2008」(H340 × W200)



2022年「Untitled:2022」(H375 × W230)





2023年「Untitled :2023」(H370 × W238)

## 〈桜井 玲子 プロフィール〉

---

### 〈略歴〉

- 1967 桑沢デザイン研究所テキスタイル科 卒業
- 1969 渡仏 (～1974)
- 1982～ 新制作展 (1983,1987 新作家賞受賞)
- 1989 新制作協会 会員推挙
- 1990 東京テキスタイル研究所 講師 (～2009)
- 2009～ スタジオ AZ を主宰

### 〈個展〉

- 1984～2018 東京、京都、宮崎などで 21 回開催

### 〈グループ展〉

- 1988 二人展 (三岸黄太郎・桜井玲子) / フランス  
現代作家タペストリー 10 人  
(日本橋高島屋インテリアアートギャラリー) / 東京
- 1989 現代作家タペストリーと彫刻展 / 東京

- 1990 建築空間とアート展 / 京都
- 1992 現代作家タペストリーと彫刻展  
(草月会館) / 東京
- 1993 日本海外現代作家タペストリーと彫刻展  
(草月美術館) / 東京
- 1994 現代作家タペストリー展  
(富士市文化会館) / 静岡
- 2009～ スタジオ AZ テキスタイル NOW 展  
(13 回開催 -2003 年現在 -) / 東京